

3月10、11、12日の週末、シエラネバダ山脈に囲まれた観光都市、ネバダ州リノ市で開かれた、カリフォルニア州加害者プログラム連絡評議会主催、第一回西部地区ドメスティックバイオレンス会議に出席してきました。

初日の午前は、カリフォルニア州、ネバダ州、オレゴン州から1人ずつパネリストを迎え、それぞれの州の加害者プログラムに関する法律や、運営上の相違点と共通点についての話をききました。また、ファシリテーターが多く出席したこともあってか、ファシリテートするにあたっての相談やアイデアも交換されました。特に印象深かったのは、加害者がプログラムの内容を理解し始めて「魔法が起きる」のは40週目頃、という報告がどの州のファシリテーターからも出たことです。付け焼刃ではなく、長期的な取り組みが加害者プログラムには求められることを改めて裏付けているのではないのでしょうか。

午後は、DV専門家からプレゼンテーションがありました。ここ5年ほどの間に、新たなDV研究報告が次々と発表されているそうです。現在特に論議を呼んでいるのは、暴力をふるっているのが女性である場合、その暴力行為をどう解釈し、その女性をどう位置づけ、どのような対応をしたらよいのか、という問題です。これに加えて、従来の夫婦カウンセリングは、被害者に二次的被害を与える恐れがあるため、DV対応策としては不適切であるばかりでなく大変危険であることが分かっています。これらを踏まえて、事前面接の更なる改良と、DV特定夫婦カウンセリングを開発してはどうかという提案がなされました。アメリカのDV対策は日本より30年進んでいると言われていています。そのアメリカの課題と反省からも学べる立場に日本があることは、よりよいDV対応策を追求していく上で、大変幸運であると感じました。

2日目の午前は、神経心理学の専門家から、トラウマとDV行動と脳神経の関連性についての講義があった後、アウェアの山口のり子さんが特別ゲストとしてスピーチされました。出席者の関心は大変高く、できることなら日本へ行って少しでもお手伝いしたい、と申し出てくださいる方が何人もいらっしゃいました。午後は、ワークショップ形式で、20世紀最高の心理療法家といわれるバージニア・サティアが提唱した「スカルプティング(造形)」というテクニックを実際に体験しました。この手法は心の奥底に隠れている記憶や感情を呼び起こすので、出席者が涙ぐむ場面も見られました。しかし、このような家族療法を実際に加害者プログラムに取り入れるには無理がある、という現場からの批判も聞かれました。

最終日は、「文化対応型加害者対策について」と題し、アメリカ先住民、キリスト教信者、ラテン系住民を対象に加害者プログラムを実施している方一人ずつからお話を聞きました。ラテン系地域社会・文化は、日本との類似点が多いようです。ですから、一般アメリカ社会を対象として開発された加害者プログラムを、どのようにしてラテン系地域社会に適応させているのかを知ることは、アメリカで開発されたDV対策方法を日本の環境に応用する上で、参考になるかもしれません。また、一般アメリカ人に比べ、ラテン系の被害者の多くは、加害者との結婚生活を続けたがるそうです。この場合、加害者プログラムを被害者支援策として投入することの意義が更に強まります。このことは、離婚率が低い日本に加害者プログラムを広めることの重要性を示唆しているように思われました。

会議が幕を閉じると、外は小雪がちらつく中、出席者の面々は車や飛行機で帰途につきました。月曜日からはまたそれぞれの場所でDV問題に取り組んでいくのでしょうか。私は休暇をかねてこの会議に出席しましたので、もう一泊して近くのスキー場で遊んでから帰りました。皆さん気持ちの良い方ばかりで、休憩時間や夕食パーティーでのおしゃべりも楽しいものでした。日本人が出席していると知るとうれしがってくださり、はげましてくださいました。来年はロサンジェルス近郊のロングビーチで開く予定だそうです。また出席できればと思います。